



## 第38回

# 日本障害者スキーのパイオニア

# 大日方邦子

obinata kuniko

スポーツ歴史の検証の第4シリーズでは、パラリンピックを舞台に活躍し、日本における障害者スポーツの発展に強いリーダーシップを発揮してきた方々の証言をまとめていく。

第1回は、3歳のときに事故で両足に障害を負いながら、パラリンピック5大会に出場し、長野では日本人初となる冬季大会での金メダルに輝いた大日方邦子さんにお話を伺った。

5大会で獲得したメダルは、金メダル2つを含め合計10個。パラリンピック冬季種目においてはこれまでで日本人最多だ。障害をものともしない活発な子ども時代、高校2年生でのチェアスキーとの出会い、弁護士を目指して通った大学とスキーとの両立、金メダル、そして引退——。

現在は(株)電通パブリックリレーションズで2020年に向けてパラリンピックと人々とを結びつける重要な役割を務める大日方さんに、選手人生を振り返るとともに2020年への展望や思いを語っていただいた。

聞き手は第3シリーズに引き続き、「スポーツ実況のカリスマ」として知られた元NHKアナウンサーで現在は法政大学スポーツ健康学部の教授を務める山本浩さんが担当する。

聞き手／山本浩 文／高橋玲美 構成・写真／大日方邦子、堀切功、フォート・キシモト

## 人々とパラリンピックとを マッチングする日々

—— 大日方さんは現在、電通パブリックリレーションズに勤務しながら、日本パラリンピック委員会運営委員や日本パラリンピアンズ協会の副会長などを務めておられます。今をときめく仕事でしょう。いえいえ、そんなことはないですよ(笑) 下支えする仕事だと思っています。競技団体、選手会、パラリンピアンズ協会、文部科学省をはじめさまざまな省庁と関わりながら、コミュニケーション面でのお手伝いをしています。外に出ることが非常に多い毎日です。

—— パラリンピックを支援したい人とパラリンピックとの間に道をつけるお仕事？

2020年東京オリンピック・パラリンピックが決まってからは、パラリンピックに関心のある企業や団体が増えてきています。パラリンピックに関わりたいけれどもどんなやり方があるのかと模索されているところに、道筋というほどではないですが、たとえばパラリンピックの選手を起用したCM制作のお手伝いとか、ですね。

—— もともとテレビのディレクターをされていたので、一般人が気付かないところまでぎゅーっと絞っ

ていくディレクター感覚が活きるのではないですか？番組をつくるという経験によって、ものの本質は何かとか、切り口によってまったく違う見え方があるといったことを学びました。これは自分の生き方のなかでも役に立っていると思います。

## 弟たちを従え おてんば三味<sup>ざんまい</sup>の子ども時代

—— ご家族はスポーツに積極的でしたか？

父が日本郵船に勤めていて、大学時代にはヨットをやっていたり、仕事でもよく外国に行ったりと海に近い生活でした。私が最初に経験したスポーツも水泳でした。海で泳げるようになってほしいという父の望みと、もうひとつは小学校でプールの授業があって、泳げないと参加できないという理由もありました。

—— 子ども時代、体を動かすことはお好きでしたか？

大好きでした。小さいころの写真はいつも、自転車に乗っていたりブランコに乗っていたり駆け回っていたり。義足で自転車をこぐのはとても難しいんですが、自転車でバランスをとりながら下り坂を気持ちよく走っては、弟たちに押ししてもらって登って戻ったり。弟たちはよく付き合ってくれましたね。すごく仲の良い姉弟でした。



2000年シドニー、2004年アテネ両大会はNHKの一員として現地で取材

## あしかせ 義足を足枷にしない 「バリアフリー」生活

—— 車いすに乗り始めたのはいつですか？

実はNHKに入局してから……スキーを始めてから、と言った方がいいですね。それまでは、義足をつけて歩いて生活していました。「歩いて生活できるようにしよう」というのが両親と医療関係者の共通の目標でしたし、車いすでは養護学校にしかな行けないけれども歩けば地元の一般の学校に行ける、という大きなポイントもありました。

—— 体を動かすことが大日方さんにとって良いという判断？

はい。障害は幸い両足だけですんでいたもので、両親は「義足だから〇〇はやめなさい」とは一切言わなかったんです。そうではなく、実現するための方法を考えようというのが両親の一貫した方針でした。「歩いて通学できること」が条件だった一般の小学校に入学させるために、学校の近くに家を建てたり、体育の授業についても見学ではなく参加させてほしいというお願いを親から出したと聞いています。

—— お話を伺っていると、世界観が「バリアフリー」ですね？

そうですね。障害があるから諦めるのではなく、なんとか解決して目的に向かおう、という育て方をしてもらいました。そして

スポーツ、勉強も含めて、ひとつにのめり込むのではなく、いろんなことを体験して欲しいと、大人になってから自立できるようにと考えてくれていたのです。

## 負けず嫌い精神で さまざまなスポーツに挑戦

—— 体育では何が得意でしたか？

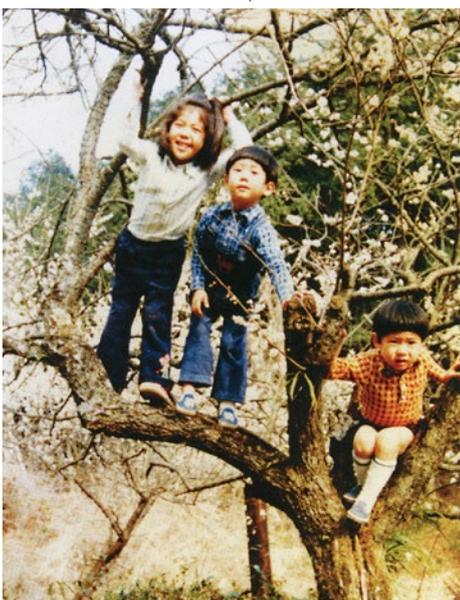
鉄棒など、上肢を使うものはやはり得意でした。跳び箱も低い段数なら跳べましたし、50m走なども、もちろんゆっくりとしか走れないですけど、ひと通りやりました。バスケットボールもサッカーも、自分なりに考えてやりましたし、すばしっこい子だったのでドッジボールも強かったですし、これはできないなと思ったスポーツはハンドボールくらいかな。

—— かなりの負けず嫌いだった？

そうですね。「やる以上は勝つぞ！」と(笑)

—— 男の子からしてみれば、やっかいな女の子だなと思ったでしょうね。また、早い段階から足を使ってさまざまなスポーツをしていたのは、後にとって良かったのでしょうか。

ええ、アスレチックや木登りもしましたし、そういうことを通じて身体能力が全体的に鍛えられたと思います。足だけでなく体全体を使って、体のバランスをとることができるようになりました。アンバランスな状態でバランスをとるスキー競技には非常に役立ったと思います。



弟たちを従えて木登りに挑戦



幼稚園の運動会にも義足で参加



障害者を対象とした水泳教室に通う

## こんなに楽しい スポーツはない！ チェアスキーとの出会い

——スキーは、大日方さんにとっては一番遠いスポーツだったのでは？

そうですね。10歳くらいのときにたまたまテレビで見て「かっこいいな」と思い、自分にもできるか医者に聞いてみたことがあったんです。でも、「君の状態では……。自分の娘なら絶対やらせない」と言われて諦めました。17歳のときに、横浜市のリハビリテーションセンターで偶然、チェアスキーを見て、これならできるかも、と。年に1回開かれるチェアスキーの初心者講習会に向けて、団体への登録や準備を全部自分でして、翌シーズンの講習会に参加しました。高校2年の冬でした。

——どのくらいの規模、日数の講習会だったのですか？

たしか、初心者講習者10人くらいに先輩スキーヤーやボランティアを加えて50～60人、4泊5日の講習会でした。すごく楽しかったです。学校の先生も応援してくれて、公欠扱いで講習会に送り出してくれました。

——それは恵まれていましたね。

はい。このとき「行っておいで」と背中を押してくれた学校の先生や、スキーウェアがどんなものかも知らなかった私にいろいろと教えてくださった先輩スキーヤーのみなさん……。出会いにも恵まれていましたね。

——1980年代当時は富良野でワールドカップスキーが開かれ、人工降雪機が普及しだし、日本にスキー熱が盛り上がってきたころでしたね。当時チェアスキーは出始めでしたか？

チェアスキーの開発が始まったのが70年代半ばごろからと聞いています。当時はスポーツというより生活のための福祉機器として、医療関係者を中心とした開発でした。車いすユーザーにとってはハードルの高いアウトドアスポーツを可能にするための用具開発が、車いすユーザー自身も関わって進められていきました。



チェアスキーの存在を知り、憧れの雪山へ

——最初にチェアスキーに乗ったときの印象はどうでしたか？

フラフラして、センターでバランスをとるのが大変でした。初心者はまず、チェアスキーを支えてもらいながら乗りこむんですけど、はじめは乗った瞬間に転ぶような状態でした。2日目くらいから感覚やコツがつかめてきて、まったくの初心者クラスから、ちょっと滑れるクラスに変更してもらいました。全身筋肉痛になりましたが、こんなに楽しいスポーツはないと思いました。今もその気持ちは変わりません。楽しい経験をすれば後が続く、というのは教える立場になっても感じていることです。

——では、講習会の後にはまたすぐにでもやりたという気持ちになっていたわけですね。

はい、ただ、やはりそう簡単にできるものではなくて。チェアスキーを借りないといけないし、ゲレンデまで持って行くのも大変ですし、そう気軽にできるスポーツではないと理解はしました。講習会には高2、高3と行きました。そのあげくに浪人してしまった年にはさすがに行きませんでした(笑)

## 気軽にゲレンデに行きたくて 強化選手に

—— 大学に入ってからスキーとの関わりは？

大学通いに慣れて時間ができると、新横浜のリハビリテーションセンターに隣接して作られたスポーツセンター「横浜ラポール」によく遊びに行くようになって、ボウリングや、テニス、卓球など、車いすで

楽しめるスポーツと出会いました。そこで初めて「パラリンピックって知ってる？」と言われたんです。パラリンピックという大会のことも、アルペンスキーがパラリンピック競技であることも初めて知りました。パラリンピックを目指す強化合宿に参加すれば、自分で雪道を運転するハードルは取り除かれるし、先輩と仲良くなればもっと気軽にゲレンデに連れて行ってもらえる……。それなら

やってみたくて、と。ただ、強化選手になるには道具を買わなければいけないと言われ、親に話したところ大反対されました。「スキーは趣味で十分でしょ」と。両親は「スポーツは競うものというより、人生を豊かにするもの」という認識だったんです。

—— バイオリンを趣味として習わせたらいきなり「ストラディバリウスを買ってくれ」と言われたようなものだったんでしょう。

ええ。しょうがないので、1年間バイトをしてお金を貯め、子どものころからのお年玉も全部はたいて、オーダーメイドでチェアスキーをそろえたんです。最初の板はロシニョールでした。

—— 当然、買ってすぐに家で乗ってみたんでしょう。自分専用のスキーを履いてみた印象はいかがでしたか？

家の畳の上に古い毛布を敷いて乗ってみました。みなさんやっ

てることは一緒だと思います(笑)自分の体型に合うようにオーダーメイドで作ってもらったチェアスキーのシートは、やっぱりフィットしていましたね。間にものを詰めたりして使うレンタルとは、全然違います。で、買った以上は絶対にちゃんとやろうと。

## えらいところに来ちゃったな

—— ナショナルチームはどんな団体に管轄されていたのでしょうか？

日本チェアスキー協会という、現在の日本障害者スキー連盟の正会員団体のひとつです。日本では、立位のスキーと座って滑るスキーの団体がそれぞれ別々に発展してきたのです。

—— 初めてナショナルチームの合宿に参加した感想はいかがでしたか？ 周りを見ると、自分の実力がわかると思います。

初めて参加したのが大学1年の冬だったのですが「えらいところに来ちゃったな」と感じました。他の選手はみんな、崖みたいのところからすいすいと滑り降りていて、コーチたちにも放っておかれましたし、なんとか自分で降りるしかありませんでした。私ひとりだけ明らかにヘタなので「どうしたら早く追いつけるかしら」と必死で考えました。

—— 昔ながらの負けず嫌い魂がむくむくと？

だと思います。最初の合宿では最後の最後になって大回転のポールに入って、しっちゃかめっちゃかになりながら一応滑りきって。



—— その後のスキーと自分との関係はどうになりましたか？

ちょうど、93年のシーズンは、94年のリレハンメル大会に向けて選手選考が行われるという通知が来たところで、月に1回くらいは、先輩選手たちと合宿や自主練習をしていました。どこかの先輩が練習に行くと聞けば、押しかけて行って車に乗せてもらっていました。大人の世界に入れてもらって、思いっきり青春を謳歌している感じでした。仲間内には92年のアルベールビルパラリンピックで日本で初めてメダルをとった女性の選手がいらして、とてもかわいがっていただきました。

## 大学とスキーの両立生活

—— 弁護士をめざして中央大学へ進学されたそうですが？

事故のあとの裁判などで弁護士に助けてもらい、人の役に立つ仕事っていいなと感じたところから将来の夢になりました。

—— 平日は大学で弁護士をめざし、週末はスキー？

現実的な話ではなかったですねえ。でも六法全書など分厚い本を持って歩いてましたね。ただ、地元の横浜から八王子まで、乗り換えの複雑な2時間の通学が大変で……。もともと私自身はあまり「障害者」というカテゴリーのなかで自分が動いている認識がなく、男性か女性かといったアイデンティティのひとつとして車いすを使って生活しているとか、長距離を歩くのがむずかしいといった意識はいるんですが、そのときに初めて自分の障害を感じたかもしれません。この困難を解決するために、大学にお願いして、車での通勤を認めてもらいました。大学に入学が決まったあと、親の勧めで車の免許をとっていました。

—— やはり、要所要所でご両親が道しるべを？

そうですね。両親は私に対して何にしても自分で判断し、自分で計画しながら動きなさいというスタンスをとりながら、何か問題があったときにはすぐにサポートできるようにセーフティーネットを張ってくれていたと思います。車にしてもスキーにしても、両親の手のひらの上で自由に動くという、非常に恵まれた環境でした。

—— 大学とスキーの両立生活の刻みを教えてください。

授業にはちゃんと出ていました。朝から授業があると朝6時に車で出かけて、授業の間でコマが空いていたら図書館などで勉強して、大学2年になって授業の要領がわかってからは、行きか帰りにラポールに寄ってコンディショニング。日曜はかならずラポールで過ごす。1週間のうちに3、4日は体づくりをしていました。

—— 弁護士の夢はどうなっていましたか？

大学2年の終わりにリレハンメル大会の選手に選ばれて、選ばれたからにはやるぞ、弁護士は大会のあとで考えよう、と思いました。その後リレハンメルを終えて長野を目指す時決めたとき、スキーをしながら、スキーと同様にお金も時間もかかる司法試験への勉強もするというのは現実的ではないなと思い、自分で稼ぎながらスキーをするという選択肢をとって、就職活動をしたんです。

—— ご両親はそんな大日方さんをどのように見守っていらっしゃいましたか？

父は、私が弁護士になることを強く望んでいたので「スキー選手としての活動には賛成しない」という姿勢でしたね。長野大会のときもそれは一貫していました。母と弟は観に来てくれたんですけど。怪我も心配だったんでしょうね。当時はパラリンピック=趣味の延長であり、「パラで勝って何するの？」という捉えられ方でした。



大学1年の夏、アメリカにて

## いわば「21世紀枠」で リレハンメルへの代表に

—— 国内の大会で初めて優勝したのはいつですか？

94年のリレハンメル直前のジャパンパラリンピックで、大回転で優勝しました。先輩たちは実力を

認められて選ばれているなか、私はまだそのレベルに達していないのに長野大会を見込んで選ばれた21世紀枠みたいな身。実力があるのに行かない方たちへの責任のようなものを感じて、プレッシャーもありました。

—— 海外での大会を経験したのはいつが最初でしたか？

リレハンメルです。ダウンヒル(滑降)の練習も、リレハンメルについてから初めて経験しました。日本にはダウンヒルができる環境がなかったので、当時の日本選手はみんな、そんな感じでしたね。

—— いきなりリレハンメル大会ですか！ ダウンヒルもそこで初めて！ それはすごいですねえ。

えらいことになったと思いました。本番では、ヘッドコーチに「お嬢ちゃん、危ないからとにかく安全に降りてきてね。顔に傷でもついたら大変だよ」と、完全に相手にされてなかったんですね。

—— ガチガチにならないようにという配慮の言葉だったんでしょうね。ダウンヒルは最初の種目だった？

最初でした。ダウンヒル、スーパーG(スーパー大回転)、大回転、スラロームの順に競技は行われました。ダウンヒルはコーチの言ったとおり慎重に滑って、5人滑りきって5位。ゴールしたとき「生きて帰ってこれた」と思いました。

—— 他の種目は？

他は全部コースアウト&棄権でした。

—— 初めてのダウンヒルだけ結果が出て、あとは全部だめだった？

そうですね、最初のダウンヒルで滑れたことで欲が……攻める気持ちが出て、スーパーGではネットをつき破って谷に落っこって救急車でした。肩を少し痛めたくらいで、別にたいしたことはなかったんですが。

—— リレハンメルでは、アメリカのサラ・ウィル選手との出会いが大きな収穫だったそうですね？

はい。当時、アメリカに台頭著しいすごい選手がいると聞いていたのがサラ・ウィル選手でした。「私たちはこんなことができるっていうのを世界に示しているんだよ」と、今でこそ浸透してきているパラリンピックの精神ですが、当時からストレートにそれを言葉にしていたのが彼女でした。普段はもの静かで、試合のときの集中力とゴールしたときのやわらかい笑顔のギャップ、オン・オフの切り替えがとても鮮やかな選手で憧れの選手でした。

—— リレハンメルでの自分の競技については、どんな手応えをつかんで帰ってきましたか？

惨敗、のイメージですね。と同時に「チャレンジするのにおもしろい世界」だなど。すぐ勝っていたらあっさり辞めていたと思うんですけど、そうでなかったから挑戦しがいがあった。憧れの壁がありました。

## 長野大会へ向け スキーに全力投入した日々

—— そのあと、いよいよ競技スポーツとしてのスキーにのめりこんでいった？

のめりこみました。ラポールの指導員がナショナルチームのコーチでもあって、競技は自己責任であること、基礎体力の大切さ、食べ物のことなども含めて競技スポーツの何たるかを教えてくれました。

—— 女子大生ですと、ケーキやアイスクリームなどの甘いものを食べに行くといったことが、当たり前のようにあるはずですが、そういうことは節制していらしたのですか？

はい。選手としての意識は高かったと思います。「勝ちたいなんて口だけで言うな」とよく言われていたのもあって、自然にやるならちゃんとやろう、



1994年 初めて参加したリレハンメルパラリンピックの開会式(左)

という思いでした。

——長野まではしっかりと準備ができましたか？  
やれることはすべてやろうと思っていたので、寸暇を惜しんで練習しました。長野間近の年はNHKディレクターとしても1年目だったので、いろいろと無茶はしていたと思いますが。長野パラリンピックに向けて、国の取り組みとして、さまざまな選手をトライアウトしていたこともあり、国内での競争がとても熾烈でした。皆さんがすごく長野パラリンピックに出たいという競争のなかで、選手としての責任を感じ、出場する以上はメダルを獲りたいと強く思いました。

## 長野大会で 「一夜でシンデレラ」を体験

——そして、長野で栄冠に輝きました。  
獲れると思っていたがダウンヒルで金メダルを獲れたので、自分が一番びっくりしました。ただ、自分の中では勝機はあると思っていたんです。練習のチャンスが少ないのは外国勢も同じだし、トレーニングランで組み立てていけるダウンヒルは戦略的なスポーツでもあり、度胸勝負なところもあり、肝の座っている人は強いですね。戦いに行こうという意識で臨みました。

——自国開催というのも大きかったのでは？  
長野パラリンピックは、オリンピックと同格というならばちゃんと運営するぞっていう地元の方々の意気込みがまずあって、素晴らしい競技環境をつくってくださっていました。滑る直前に、ヘッドコーチに渡されたトランシーバーからゴールエリアの

「うおおお」って歓声も聞こえてきて。

——それはすごいモチベーションサウンドですね。  
もう絶対、この歓声のなかにゴールしたいなと。モチベーションがガッと上がりました。

——アルペンの世界では、きわどいタイム差での優勝も珍しくないのですか？  
00.98秒差かな。私はもともと上位の選手ではないのでスタートが早かったのですが、そのあと、どんだん格上の選手が降りてきても電光掲示板の一番上にはいつまでも私の記録が出ていて、一夜にしてシンデレラってこんな感じなのかなと思いました。今みたいにセキュリティが厳しくなかったからでしょうけど、選手村でドアを開けたら花束とか、色紙を持った人が待っているんですよ。どこに行っても人に囲まれておちおち食事もできないので、チーム側のはからいで選手村から別の所へ移ったんです。

——AKB48みたいですね。  
ははは、なんだったんでしょうね……。大会の期間中にも、NHKの会長がわざわざ激励に来てくださったりとか、貴重な体験をさせていただきました。

——長野以降、生活の部分、技術的な部分で変化はありましたか？  
地元開催のお祭り騒ぎから復帰してからは、NHKのディレクターとしてキャリアを積むという気もありましたし、スキーヤーとしても荒削りの自覚があったので、もっと技術的に高いところに行けぞうだなという感触がありました。競技者とディレクターの両方で生活が進んでいきましたね。



1998年 長野パラリンピック滑降座位で金メダルを獲得



1998年 長野パラリンピックの閉会式に笑顔で臨む

## 自分を誇りに思えた 2つ目の金

——それからトリノで、2つ目の金を獲られました。どんなメダルでしたか？

重かったです。自分自身の「勝ちたい」という気持ちをどうコントロールするか。「勝とう」と思えば思うほど力が入ってしまって、本番前の緊張感も増してきて……。大きな試合になるとプレッシャーがかかってしまうという経験をソルトレークでもしましたし、自分のベストを出すために一つひとつ歯車をアジャストさせていく難しさを感じていましたから。



2006年 トリノパラリンピック  
大回転座位で金メダルを獲得

——スキーの世界ではダウンヒルのタイトルも大きいですけど、大回転というのも非常に重いですね。

重いです。ダウンヒルでもスーパー-Gでも金を獲りに行ったのですが、気持ちが噛み合わなくて、結局消極的なレースになってしまったんですね。そのなかで、勝

つのはやっぱり難しいなと思いつつながら獲れた金メダルが大回転だったというのは大きいです。自分自身がやってきたことが間違いじゃなかったというか、何より自分自身を誇りに思えました。

## 2020年の先に「文化」を 根付かせるために

——その後バンクーバー大会を区切りに、引退をされました。今もパラリンピアンとして、充実していらっしゃるでしょう。

そうですね、やるべきことがたくさんあって、あふれ返っている感じです。

——今、2020年を見据えるスクリーンのなかによくの人が描く色々な映像がひしめいていますが、そのなかで何が大切だと感じていらっしゃいますか？

そうですね。まあ、みなさんおっしゃるんですけど、2020年は一過性のものには終わらせてはいけません。お祭りはもちろんお祭りなんですけど、トップスポーツも生涯スポーツも、観るスポーツもするスポーツも含め、いろいろな意味でのスポーツというものがしっかりと文化として根付くためには、大会のあとに何を残すのか、しっかりと検討して、準備することが必要です。長野を経験した者として、大会後に盛り下がるのは織り込み済みなんです。スポーツの根源的な価値を文化として根付かせるための準備を2020年までのステップのなかでどれだけできるかで、そのあとに残るものが決まってくると思っています。

——2020年東京大会を目指す若い選手に対してはどんなことをおっしゃっていますか？

今、パラリンピアンを取り巻く環境は、1ヵ月単位というスピードで変わっています。アスリートにとっては飛躍的にいい競技環境ができてきていますから、それを受け止める「自力」をしっかりと育もうと若者には言っています。たとえば、その環境を維持するためにたくさんの人の支えがあるなかで、初めてできるのがスポーツというものであると。今、与えられている競技環境が、当たり前ではないということ。また、金メダルを獲ることは自分にとっては価値があることだけれど、金メダルを獲ることが社会に役立つことではなく、金メダルを獲ったらその先に何をしたいかを考えて、社会に貢献していくことが重要であること。そういうことをわかったうえでチャレンジしてもらいたいな、と。若い人にあんな



2006年 トリノパラリンピック大回転表彰式

り言うと説教くさくなっちゃいますけどね。

—— 10月にスポーツ庁ができますね。どんな期待を持っていますか？  
 庁の設立によって、スポーツの果たす役割がより厳しく求められると思っています。2014年4月に文部科学省に障害者スポーツの大部分が移管されて以降、我々の想像もなかったスピード感でスポーツ環境が整いつつあり、それが今後さらに加速して行くと思えます。スポーツそのものが日本でもっと愛されるようになるためにも、今が大きな分岐点だろうと感じています。またスポーツをすること、スポーツに関わることの価値を広く社会全体に認められるためには、スポーツと自分とは関係ないと思ってる人たちにどうアプローチするかももっともって考えていく必要があって、そういう所で私たちのように障害があり、スポーツをやってきた人たちが貢献できるんじゃないかと思っています。

## スポーツへの扉を一緒に ノックする役目を果たしたい

—— 体の具合が悪いとか、あまり外に出たくないとかで、心身に障害のある人々がスポーツの世界に対して躊躇している。一步踏みこんでもらうためには何が求められていると思いますか？  
 いわゆる健常者に比べると、障害のある人たちがスポーツに接するのはハードルが高く、機会がまだ少ないと思うので、まずは始めの一步となるきっかけを数多くつくりたいと思っています。ためらって閉じこもっている人たちのドアをトントンとノックして、スポーツを身近に感じられるチャンスをたくさんつくることです。

—— 今、電通でPRされているのも、ノックしたり、ドアノブの音をたててみるという仕事でしょうか？  
 そうですね。2020年が決まったことによって、ドアをノックしてみようと思う人が増えているのは確かです。スポーツをやってみたいと思う人が増



2010年 バンクーバーパラリンピック大回転座位で銅メダルを獲得し両手をあげて喜ぶ

えているのも確か。それがうまくマッチングするように、一緒にノックしたいと思っています。

—— 最後に、今後のご自身の夢を教えてくださいませんか？

私自身の夢は探し中という感じです。アスリートのセカンドキャリアは、パラリンピアンに関しては特に難しいなと思っていて、パイオニアとしてドアを開け続けてきたところへ、急に前方の景色がぱっと広がった気がして、自分がアスリートを終えたあとのロールモデルがちょっとまだ見えていない。走りながら考えているって感じですね。

—— この仕事に金メダルはないかもしれませんが、2020年の向こうまでずっと続けていただければと思います。ありがとうございました。



東京2020オリンピック・パラリンピックカウントダウンイベント



2013年9月 「2020大会開催都市決定を迎える会」にて

1945 第二次世界大戦が終戦  
1947 日本国憲法が施行

1950 昭和25  
第1回切断者スキー大会、ドイツにて開催  
1950 朝鮮戦争が勃発  
1951 安全保障条約を締結  
1955 日本の高度経済成長の開始

1959 昭和34  
交通事故で片足を切断した深沢定実氏が、片足でのスキーを始める

1964 昭和39  
第1回デモンストレーター選考会、山形県・蔵王スキー場にて開催  
1964 東海道新幹線が開業

1965 昭和40  
深沢定実氏、全日本スキー連盟の1級検定試験に合格  
1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1972 昭和47  
第1回全国身体障害者スキー大会、北志賀竜王スキー場にて開催  
1972 大日方邦子氏、東京都に生まれる

1973 昭和48  
日本身体障害者スキー協会設立  
1973 オイルショックが始まる

1976 昭和51  
車いす使用者のためのチェアスキー開発が始まる  
チェアスキー1号機の雪上テストが行われる  
1976 大日方邦子氏、3歳のとき交通事故により負傷  
1976 ロッキード事件が表面化  
1978 日中平和友好条約を調印

1980 昭和55  
日本チェアスキー協会設立  
第1回日本チェアスキー大会が開催される  
1982 東北、上越新幹線が開業

1984 昭和59  
インスブルックパラリンピックにて、日本選手団が初参加  
チェアスキーがパラリンピックでデモンストレーションとして実施される

1988 昭和63  
インスブルックパラリンピックにて、チェアスキーが正式種目となる  
1989 大日方邦子氏、高校2年のときにチェアスキーを始める

1992 平成4  
アルベールビルパラリンピック開催  
日本選手4名参加。銅メダル2個獲得

1994 平成6  
リレハンメルパラリンピック開催  
日本選手10名参加  
銀メダル3個、銅メダル3個獲得  
1994 大日方邦子氏、リレハンメルパラリンピック参加初のパラリンピック参加となる  
1995 阪神・淡路大震災が発生

1996 大日方邦子氏、NHK入局  
大日方邦子氏、オーストリア・アルペンスキー世界選手権にて銀、銅メダルを獲得  
1997 香港が中国に返還される

1998 平成10  
長野パラリンピックのアルペンスキー競技において、日本選手がメダルを獲得し、障がい者スキーが脚光を浴びる  
1998 大日方邦子氏、長野パラリンピックにて金、銀、銅メダルを獲得

2000 大日方邦子氏、スイス・アルペンスキー世界選手権にて銅メダル2個獲得

2001 平成13  
日本身体障害者スキー協会、日本チェアスキー協会、日本障害者クロスカントリースキー協会の3団体を総括する日本障害者スキー連盟が設立

2002 大日方邦子氏、ソルトレークシティパラリンピックにて銅メダル2個獲得

2004 大日方邦子氏、オーストリア・アルペンスキー世界選手権にて金メダル2個獲得

2006 大日方邦子氏、トリノパラリンピックにて金メダル1個、銀メダル2個獲得

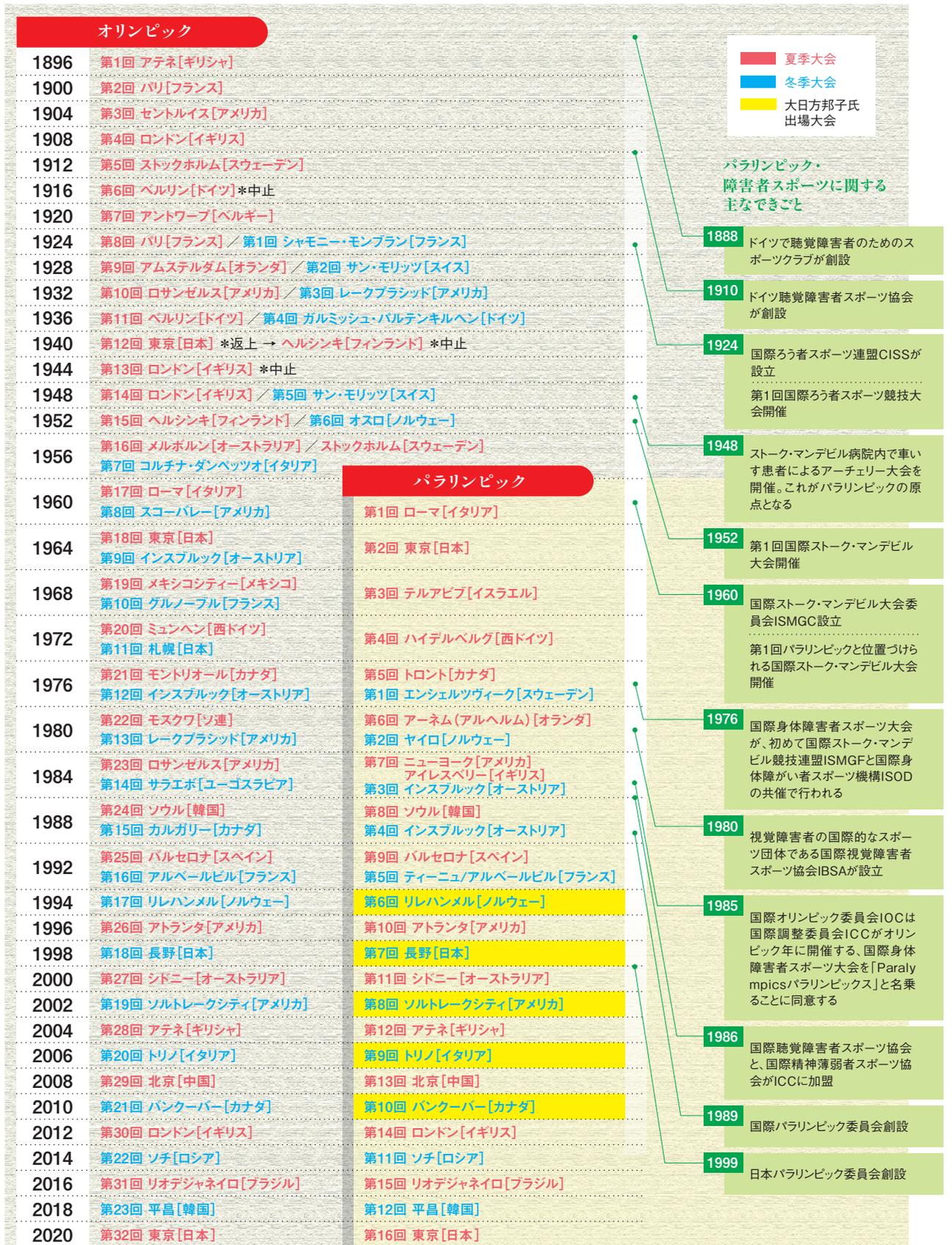
2007 大日方邦子氏、株式会社電通パブリックリレーションズ入社  
2008 リーマンショックが起こる

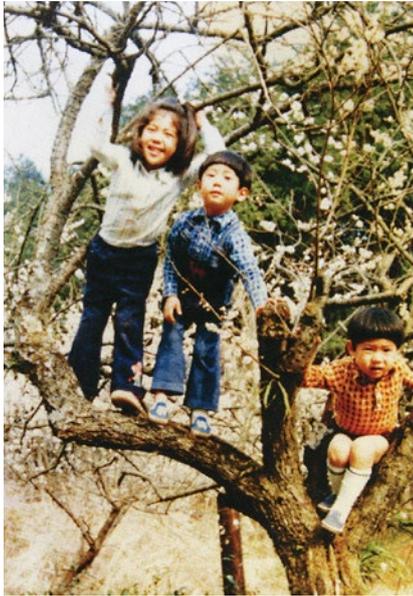
2009 大日方邦子氏、韓国・アルペンスキー世界選手権にて銀メダル1個、銅メダル2個獲得

2010 大日方邦子氏、バンクーバーパラリンピックにて銅メダル2個獲得し、選手生活を引退する

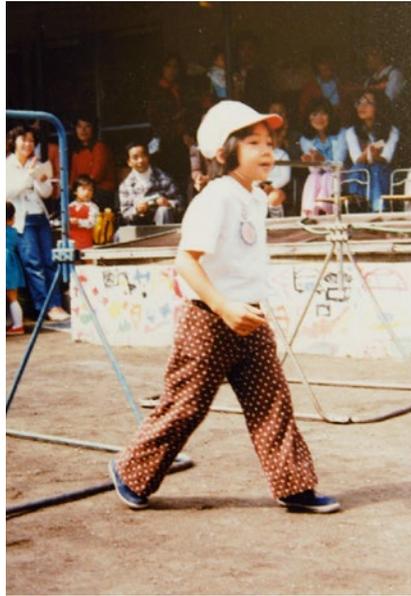
2011 東日本大震災が発生

オリンピック・パラリンピック年表





弟たちを従えて木登りに挑戦



幼稚園の運動会にも義足で参加



チェアスキーの存在を知り、憧れの雪山へ



障害者を対象とした水泳教室に通う



大学1年の夏、アメリカにて



2006年 トリノパラリンピック大回転座位で金メダルを獲得



2006年 トリノパラリンピック大会大回転表彰式



1994年 初めて参加したリレハンメルパラリンピックの開会式(左)



1998年 長野パラリンピック滑降座位で金メダルを獲得



1998年 長野パラリンピックの開会式に笑顔で臨む



2000年シドニー、2004年アテネ両大会はNHKの一員として現地で取材



2010年バンクーバーパラリンピック大回転座位で銅メダルを獲得



2010年バンクーバーパラリンピック大回転座位で銅メダルを獲得し両手をあげて喜ぶ



大日方邦子



2013年9月 「2020大会開催都市決定を迎える会」にて



東京2020オリンピック・パラリンピックカウントダウンイベント